

パーパスを見つめ サステナブルに 社内起業で多角化めざす

川端鐵工株式会社
代表取締役社長

川端 康夫 氏



創業70周年を迎えられました。沿革をお尋ねします。

石川島造船(現 IHI)に勤めていた父が戻ってきて、1952年に川端鐵工所を創業しました。漁船の修理や、家庭用の鉄製品を作っていました。昭和30年代に黒部に企業立地が進むと、工業機械関係の仕事を受けるようになり、徐々に設計も自社で手がけるようになりました。

現在の主力は何でしょうか。

生産機械をオーダーメイドで作っています。主力はめっき装置で、大型から小さな部品、セラミックへのめっき、また、金、銀、ニッケルめっき等、様々な要望に応じて装置を提案しています。最近では電子部品のさらなる小型化に対応する一方、液晶や半導体関連の大型処理装置も製造しています。

さらに、工業用の炉や、工場内の省力化を図る自動搬送機などにも需要が増えていきます。

売上比率ではめっき関連装置が4割強、工業炉が3割、工場内の省力化を図る自動搬送機が2割です。

—オーダーメイドの設計製造—
海外展開もされています。

自動車関連企業の海外進出に伴い、1980年代に海外との取引を始めました。89年に、めっき装置の設計から製造まで一貫体制を整えると、県外企業からの引き合いが増え、海外比率が半分にまで伸びました。2002年にフィリピンに、2008年にはタイに現地法人を設立し、その他、マレーシア、インドネシア、中国は技術提携による生産体制をとっています。国内では、関東と関西に製造の協力会社があります。

2017年に傘下に収められたマヤエンジニアリングとはどのような会社ですか。

1975年創業の大阪の機械設計会社で、高い技術を持っていますが、後継者がいないということで互いの思惑が一致し、取得しました。黒部と大阪と離れていますが、通信で仕事ができる時代ですので、とても良いM&Aでした。

ミャンマーで小水力発電事業に着手されました。

2009年に宇奈月温泉で始まった自然エネルギーを活用した町づくり「でんき宇奈月プロジェクト」への参加がきっかけで、小水力発電装置の製造も行うようになりました。100㍓の小さなものから1,000㍓の大きなものまで全国に納めてきました。

2013年にアウンサンスーチーさんが来日されたときに小水力発電装置を目にされ、「ミャンマーにも導入できないか」と相談された

そうで、数社のメーカーに打診があったようですが、手を挙げたのは当社だけでした。

ミャンマーは国土の7割に電気が通っておらず、地域ごとに起こせる小水力発電は適しています。2014年からJICAやJETROの支援を受けながら事業化の可能性を探り、現地法人も設立しました。発電機の設置だけでなく、設備のメンテナンスや電気料金の回収も含めた地域電力事業のプランを考え、精米や天然ゴムの加工など、農山村部への新しい産業を誘致する構想もあります。

2020年にいよいよ実証事業調査を開始というところで、新型コロナの感染拡大、翌年には軍事クーデターも起ってストップしてしまい、今は状況を見守っています。

—自分磨きを促進—

社員教育はどうされていますか。

以前から「社員を大切にすると企業になります」と宣言し、社外研修などに積極的に派遣してスキルアップを図っています。5年前からは「自分磨きプロジェクト」と銘打ち、仕事に直結しなくても資格取得やセミナー参加などの費用を会社が負担することにしました。

この制度を利用して英会話を始める社員もいます。今は直接仕事に関係がなくても、色々なチャレ

ンジをすることで人間力が向上し、将来的に会社へとつながってくると思っています。

外国人材の育成にも力を入れていらっしゃるようです。

海外から多様な人材を受け入れています。最初にフィリピンから技能実習生を受け入れたのは2000年でした。技能実習は日本で学んだ技術を母国で生かしてもらおうというのが本来の目的ですが、フィリピンには生かせる場がなかったため、2002年に現地法人を設立したのは、そのためです。

現地に会社ができたことで、作業員だけでなく幹部候補の人材育成にも取り組んでいます。海外産業人材育成協会(AOTS)の研修制度を利用して1年間の短期滞在で日本語の習得から仕事のスキルアップまでを研修することができるようになりました。また富山県の「アセアン地域等留学生受入事業」も活用しています。県内の大学院への留学を支援し、その後入社してもらうという制度で、この制度で2人目が入社しました。

大企業であれば、海外担当者を数年おきに交代することができますが、中小企業ではそれが難しい。ならば優秀な人を国籍にこだわらず採用していこうという考えです。

今後の経営方針をお聞かせ下さい。

中小企業は理念経営が重要だと

考えていますが、1つの理念にこだわる必要はないと思います。「サステナブル経営」「デジタル経営」「健康経営」などをうたっています。70周年を迎えた今期は「パーパス経営」(存在意義)を挙げ、会社が社会に対してどんな価値を提供できるか、しっかりした「志」を社内で共有していこうと思っています。

また、数年前に呼びかけたのが「社内起業」です。社員のアイデアを具体化し、新会社を設立するまで支援しますよと。事業化しそうなアイデアが1つあり、立ち上げに向け準備をしているところです。これからは機械関係に固執せず、色々な分野に挑戦し、会社をどんどん多様化していくのがいいのではないかと思います。

座右の銘をお願いします。

本田宗一郎さんの「チャレンジして失敗を恐れるよりも、何もしないことを恐れなさい」という言葉が好きで、常にこの思いを持っています。もう1つは「飛翔」で、会社も個人も飛び立つことが大事と思い、年度始めの会議はいつもこの言葉で締めくくっています。

会社概要

川端鐵工株式会社

創業：1952(昭和27)年3月
所在地：黒部市生地岸区247
資本金：2,000万円
事業内容：めっき装置、省力化装置、搬送装置、工業炉機械設計、小水力発電装置設計、機械組立、現場設置工事

従業員数：43名(2022年4月現在)
売上高：13億3,283万円(2021年3月期)
事業所：魚津工場
関連会社：カワバタ・フィリピン、カワバタ・テクノ(フィリピン)、ハーモニック・テクノロジー(タイ)、カワバタ・スミノ(ミャンマー)、(株)マヤエンジニアリング

URL：http://www.kanayago.co.jp/



略歴

1952(昭和27)年7月黒部市生まれ。75年金沢工業大学卒。78年川端鐵工(株)入社、95年から代表取締役。現在、黒部商工会議所会頭、黒部・宇奈月温泉観光局代表理事、日本商工会議所中小企業輸出投資専門委員会共同委員長を務める。